無意志自動詞表現と「Vる＋ことがある／ない」との比較

呂　雷寧

キーワード　*可能性、事態発生の度合い、事柄の客観性、話者の判断、客観的叙述*

1. はじめに

無意志自動詞表現[1)]は、次の⑴、⑵のように「Ｖる＋ことがある／ない」[2)]を用いた表現に置き換えても大した意味の差を生じない場合がある。

⑴　私の国ではバスがよくa. 遅れる／b. 遅れることがある。

（b：藤森2003：53）

⑵　この服は防水加工してあるので、雨にa. 濡れない／b. 濡れることがない。

一方、⑶、⑷のように両者の間に意味的にずれが生じ、言い換えられない場合もある。

⑶　彼は思い通りにならないとa. 怒り出す／b. 怒り出すことがある。

⑷　ウイルスに感染して白血病にa. なる／b. なることがあるそうだ。

（b：20090718／朝日新聞／朝刊／２総合／２頁、筆者による加筆あり）

これらの文はいずれも可能性の有無を表していると思われるが、無意志自動詞表現と「Vる＋ことがある／ない」（以下は「ことがある／ない」と略する）の間に、何ゆえにこのような差異が生じるのであろうか。本稿では、意味的、語用論的観点から、両者の類似点と相違点について考察する。

2.「ことがある／ない」に関する先行研究

「ことがある／ない」に関する先行研究として、藤森（2000・2003）と仁田（1981・1991）と金子（1980）が挙げられる。これらは、可能性との関わりを主張している点において似通っている。藤森は、「ことがある」は事柄の《蓋然

性》を表し、頻度副詞を伴う場合、可能性の頻度を表すと指摘している。また「ことがある」は、ある事態に陥る可能性があるということを表すことができるので、語用論的に注意や警告によく用いられると言う。そして否定形「ことがない」は、藤森によれば、可能性の有無について、それがまったくないという事柄の《不生起》を表し、話者の論理を越えたより客観化したものとして捉えられると言う。

これに対して、仁田（1981）は、「ことがある」は事象成立の《可能性》が存することを述べ、「ことがない」は事象成立の不可能性を述べるとしている。そうしたうえで、「こういった意義、およびそれに類似、近接する意義は、基本的に、事象成立の様相的あり方に属すると思われるものの、それのムードとの関係・ムードへのつながりは否定しさることはできないものであろうと思われる」（pp.90－91）として、「ことがある／ない」類とムードとの関連性を指摘し、それを擬似ムード（Quasi-Mood）[3] と称している。つまり、「ことがある」はモダリティの性格を有し、認識上の可能性といった話者の心的態度を表すことができると仁田は考えるのである。

一方、金子（1980）は、「ことがある」は《くりかえしのすがた》を表し、⑸に示すように、「認識の可能」とだぶって見える場合もあるものの、事実として存在する経験だけを述べているとしている。

⑸　常識はかわることがある。←→常識はかわりうる。

以下、上記の先行研究を踏まえて、事柄生起の可能性、事態発生の度合い、事柄の客観性、語用論的用法という４つの観点から、無意志自動詞表現と「ことがある／ない」との比較を進めていきたい。

3．事柄生起の可能性

無意志自動詞表現と「ことがある／ない」は、いずれも可能性の有無を表すことができる。ここで言う可能性は事物に潜んでいる、現在または未来において（ある条件下で）ある事柄が発生する可能性のことであり、それには３つの段階が含まれていると考える。すなわち、話者の判断による事柄生起の可能性と、客観的叙述による事柄生起の可能性と、事物に備わった恒常的な事柄生起の可能性（つまり事物の属性）である。

3．1　話者の判断による可能性

無意志自動詞表現と「ことがある／ない」はいずれも動詞の「る」形で終わ

る表現であるため、認識モダリティの無標形式として考えられる。したがって、これらの表現はいずれもモダリティの性質を有し、話者の判断による事柄生起の可能性を表すことができると考えられる。まず、肯定文の場合について見てみよう。

⑹　このやり方では、a．失敗する／b．失敗することがあるよ。

⑹のaとbは、いずれも未発生の事柄に対する話者の判断を表している文である。「失敗する」ことに対する確信度などにおいては違いが感じられるものの、いずれも事柄の生起する可能性を話者の断定として表していると思われる。ただし、話者の断定する事柄は、aとbとの間で異なっている。aにおいて話者が断定しているのは「失敗する」という事柄$_1$である。これに対し、bにおいて話者が断定しているのは「失敗することがある」という事柄$_2$である。すなわち、「失敗する」こと（事柄$_1$）の成立する可能性が存在するという事柄$_2$である。要するにbでは、「失敗する」という事柄$_1$の成立する可能性が存在することが客体化され、1つの事柄（すなわち事柄$_2$）として捉えられているのである。ここで話者が述べているのは、〈可能性が存在する〉という、より抽象的な事柄の成立である。

否定文の場合、無意志自動詞表現と「ことがない」はいずれも、事柄が成立する可能性がないことを話者の判断として表すことができる。

⑺　美しい国をつくろうよ。みんなができることやれば、ほんとにいい国になるなあ。美しい国は治安がa．悪くならない／b．悪くなることはない。（b：20080919／東京新聞夕刊インタビュー4頁／作家C.W.ニコル）

⑺のaとbは、いずれも話者の判断として事柄が成立する可能性のないことを表していると思われる。ここで言う事柄とは、（7a）では「治安が悪くなる」ということであり、（7b）では「治安が悪くなることがある」ということである。つまり、（7a）が「美しい国」には「治安が悪くなる」という事柄$_1$の成立する可能性がないことを表しているのに対して、（7b）は「『治安が悪くなる』こと（すなわち事柄$_1$）の成立する可能性が存在する」という事柄$_2$の成立する可能性がないことを表している。「美しい国をつくろうよ」という表現から、「美しい国」はまだ存在しない想像上のものであることが分かる。したがって、「美しい国」にまつわる事柄の成立する可能性がないことは、話者自身の判断によるものにほかならない。

このように、無意志自動詞表現と「ことがある／ない」は肯定か否定かにかかわらず、いずれも話者の判断による可能性を表すことができる。

3．2　客観的叙述による可能性

判断の主体が一般化されるにつれ、事柄の成立に関する可能性の判断は客観性を増していく。判断の主体が一般化された場合、無意志自動詞表現と「ことがある／ない」は事柄が成立する可能性の有無について客観的に叙述することになる。

この場合、話者が判断の主体に一致するか否かを問わず、無意志自動詞表現と「ことがある／ない」によって表されているのはいずれも、話者によって伝達された、一般化された判断主体の共通認識による情報であると考えられる。このことを次の例⑻と⑼で確認しよう。

⑻　東京でも雪がa．降る／b．降ることがある。　（b：藤森2003：53）

⑼　嘘をついても鼻はa．伸びない／b．伸びることがない。

上の文はいずれも、事柄の成立する可能性の有無についての客観的な叙述であると言える。⑻は「東京」に「雪が降る」という事柄の成立する可能性が潜んでいることを表し、⑼は「鼻は伸びる」という事柄の成立する可能性がないことを表す。これらの文における判断主体は表出していないが、いずれも一般化された判断主体であると思われる。つまり、誰が判断しても、同じような判断に導かれるということである。例えば、「東京」の天候状況を知っている人なら誰でも、⑻のように「雪が降る」可能性があると判断を下すだろうし、童話世界を除けば、「嘘をつく」という条件下で、「鼻は伸びる」ことが生じる可能性がないという判断を誰でも下すことになろう。

3．3　事物の属性

ある事柄の成立あるいは不成立の可能性は、それがある事物に恒常的に備わっているとすれば、その事物の属性として捉えられる[4)]。無意志自動詞表現と「ことがある／ない」はいずれも、そのような属性について述べることができる。

⑽　彼は思い通りにならないとa．怒り出す／b．怒り出すことがある。
（＝⑶）

⑾　乾癬は原因不明だが、人にa．感染しない／b．感染することはない。伝染せず、乾癬で人は死なないということから、根治法の研究が進まない……。　（b：20080529／東京新聞／夕刊書物／６頁）

⑽のaとb、⑾のaとbはいずれも事物の属性を表していると思われる。⑽によって表されているのは、「彼」に、「思い通りにならない」場合、「怒り出す」という事態が生じる可能性が恒常的に存在するということである。この「怒り出す」といった恒常的な可能性は彼の性格であり、属性の一種とも考えられる。

同様に⑾によって表されているのは、「乾癬」の「感染する」可能性がないという属性である。

本節の考察から分かるように、無意志自動詞表現と「ことがある／ない」はいずれも事柄が生起する可能性を表すことができる。その可能性には、次の３段階がある。

１）話者の判断による事柄生起の可能性
２）客観的叙述による事柄生起の可能性
３）事物に恒常的に存在する事柄生起の可能性（事物に備わった属性）

4．事態発生の度合い

無意志自動詞表現と「ことがある／ない」はいずれも事柄が生起する可能性を表すことができるが、その可能性の程度、つまり事態が発生する度合いに関しては両者の間に違いが見られる。すなわち、肯定文の場合、無意志自動詞表現が事態発生の可能性について100％の度合いとして述べるのに対して、「ことがある」はそれ以下の度合いを表すこともある。一方、否定文の場合、「ことがない」は無意志自動詞表現よりも否定の語気が強く、事態発生を完全否定し、その可能性がゼロであることを表す。

4．1　無意志自動詞表現と「ことがある」

無意志自動詞表現は事態の発生について、その度合いの高さを断言する形で表す。一方、「ことがある」は無意志自動詞表現と同等の度合いを表す場合もあれば、それより低い度合いを表す場合もある。次の⑿では、「雪が降る」ことの度合いにおいて、aとbは同じように捉えることができる。

⑿　東京でも雪がa．降る／b．降ることがある。　（＝⑻）

次の文はいずれも、無意志自動詞表現より「ことがある」がより低い度合いを表す例である。

⒀　彼は思い通りにならないとa．怒り出す／b．怒り出すことがある。
（＝⑽）

⒁　時代が変われば、常識もa．変わる／b．変わることがある。

⒀と⒁ではいずれも、aよりもbのほうが事態が発生する度合いが低いと感じられる。⒀について言うと、aとbはいずれも「彼」の「怒り出す」という事態について述べているが、それの発生する度合いが異なっている。aは「思い通りにならないことが起きる度に怒り出す」という意味を含み、「怒り出す」可能性

が極めて高いことを表している。bは「思い通りにならない時、怒り出さない場合もあるが、怒り出す場合もある」という意味が読み取れ、aより「怒り出す」可能性が低くなる。

⒁も同様である。aにおいては、「常識」は変わりやすいものとして捉えられ、「すべての常識は、時代が変わるにつれ変わっていく」という意味が含まれている。この文から、「時代の変化」と「常識の変化」の間には必然性が存在しているという趣旨が窺える。これに対して、bからはこういう趣旨は窺えない。bにおいては、「常識」はaにおけるそれより、安定性がより高いものとして捉えられている。同様に、冒頭に挙げた⑷における「ことがある」も無意志自動詞表現より事態発生の頻度が低いことを表していると説明することができる。

無意志自動詞表現と「ことがある」のこの違いは、次の⒂のような、両者が対照的に用いられている文において、より明確となる。

⒂　富栄養化　湖沼や閉鎖性海域などで、プランクトンの栄養分となる窒素やリンなどの濃度が高くなる現象。自然に起きることもあるが、多くは生活排水や工場、農地などの排水の流入といった人間活動の影響によるる。　（20080527／東京新聞／夕刊二社／10頁）

上の文は、「ことがある」と無意志自動詞表現の対照的使用、および、副詞「多くは」との共起を通じて、「富栄養化」という現象は「自然に」起きることが少なく、「人間活動の影響」によって発生する可能性が高いことを表している。次の⒃のように、無意志自動詞表現と「ことがある」を互いに置き換えると、自家撞着を起こした文となる。これは、事態発生の度合いに関して両者の間に違いが存在することに起因していると考えられる。

⒃　*富栄養化　湖沼や閉鎖性海域などで、プランクトンの栄養分となる窒素やリンなどの濃度が高くなる現象。自然に起きるが、多くは生活排水や工場、農地などの排水の流入といった人間活動の影響によることがある。

しかし、頻度副詞を伴う場合、事態発生の度合いが頻度副詞によって明示されることにより、この違いはなくなる。すなわち、次に示すように両者によって表される可能性の度合いは同等となる。

⒄　私の国ではバスがよくa．遅れる／b．遅れることがある。　（＝⑴）

⒅　このパソコンはたまにa．フリーズする／b．フリーズすることがある。

⒄のaとbには、「バスが遅れる」という事態が生起する度合いの違いが見られない。頻度副詞「よく」との共起により、aとbはいずれもそのような事態が多く発生することを表している。一方、⒅においては、頻度副詞「たまに」により、aとbはいずれも「このパソコンはフリーズする」という事態が低い頻度で

発生することを表している。

上の考察から、「ことがある」が表す事態は無意志自動詞表現よりも、問題とされる事柄の生起する可能性が低い場合があることが明らかとなった。また、頻度副詞を伴う場合には、両者の間にそのような違いが見られなくなるということも分かった。

4．2　否定の無意志自動詞表現と「ことがない」

否定の無意志自動詞表現は事態の発生に対する否定の度合いに緩みが見られる場合があると考えられる。一方、「ことがない」は無意志自動詞表現よりも、否定の語気が強く、事態発生の可能性がゼロであることを表す。また頻度副詞を伴う場合、この差異が見られなくなる。

まず最初に、頻度副詞を伴わない場合についてこのことを確認する。

⑲　（裁判員制度について）最高裁は「プライバシーは事件の関係者にa．漏れない／b．漏れることがないので、報復などの心配はない」と説明している。　（b：20081227／中日新聞／朝刊特集１面／19頁）

すでに3．1節で述べたように、否定の無意志自動詞表現が「事柄$_1$の不成立」を表すのに対して、「ことがない」は「『事柄$_1$の成立する可能性』という、抽象化した事柄$_2$の不成立」を表す。つまり、一方は事柄の成立を否定しているが、他方は事柄の成立する可能性すら否定している。したがって、「ことがない」は無意志自動詞表現よりも、否定の語気が強く、事態の完全不生起という強いニュアンスを含むと考えられる。（19b）において、「ことがない」が用いられているのは、「ことがない」が「関係者に漏れる」ことの可能性すら否定することにより、事態発生を完全否定するという強いニュアンスを含んでいるので、「最高裁」側の説明に適しているからである。「報復など」を恐れるといったことで、裁判員制度の導入に不安を感じる国民には、裁判員を務める際の安全が求められている。「最高裁」の説明では、「ことがない」が使われることによって、「プライバシーが漏れる」恐れが皆無であることが強調され、裁判員の絶対的な安全に対する最高裁側の保証が示されている。無意志自動詞表現に置き換えられた（19a）には、こういったニュアンスが薄れてしまう。

次の（20b）における「ことがない」の使用も、事態発生を強く否定できる「ことがない」の用法を拠りどころにしたものである。

⑳　（一家四人が殺害された事件から間もなく八年を迎えるのを機に、被害者の姉で絵本作家の）入江さんは一家の様子をスライドで紹介し「四人の記憶はこんなにも色鮮やか。（殺人罪の時効の）十五年という区切りでa．色あせない／b．色あせることはない」と時効撤廃も訴えた。

（b：20081228／東京新聞／朝刊二社／22頁）

否定の無意志自動詞表現と「ことがない」との間に否定の強さに関して差があることを示すために、さらに２組の例文を下に挙げる。

㉑　凧というものは、いい風が吹かないとa．上がらない／b．上がることがない。

㉒　凧というものは、いい風が吹かないとa．上がらない／b．？上がることがない。ほら、せいぜいあそこの木の高さまでしょう。

㉑のa、bはいずれも「凧が上がる」という事態の不生起を表しているが、否定の度合いは両者の間で異なっている。無意志自動詞表現（21a）では、否定の語気がそれほど強く感じられない。これに対して「ことがない」を用いた（21b）は否定の語気が強く、「まったく上がらない」という完全不生起の意味を含んでいる。そのため、㉒に示したように、「せいぜいあそこの木の高さまで」という実際に「上がっている」意味を表す成分が後続する場合、（22a）は成り立つが、（22b）は何となくつじつまが合わない表現、あるいは容認度が低い表現となる。

次に、頻度副詞と共起する場合について見てみよう。この場合、可能性の度合いという点においては、無意志自動詞表現と「ことがない」との間に大した差は見られない。両者はいずれも否定の度合いが低くなるにつれ、事態発生の度合いが高くなる。

㉓　激しい競争があっても、大手企業はめったにa．つぶれない／b．つぶれることがない。

㉔　羽田空港で除雪車訓練…（中略）…東京空港事務所の山口賢秀施設部長は「あまり雪がa．降らない／b．降ることがないので訓練を通じ走行や取り扱いに慣れ、実際に積もった場合にスムーズに除雪できるようにしたい」と話した。　（b：20091219／東京新聞／夕刊社会／11頁）

上の文においては、頻度副詞が使用されることにより、事態発生の可能性が生じてくる。㉓のa、bでは、副詞の「めったに」があることにより、いずれも「大手企業はつぶれる」という事態が発生する可能性のあることが示唆されている。同様に、㉔のa、bでは、副詞の「あまり」があることにより、「雪が降る」という事態の発生する可能性が低いながらも存在することが示唆されている。

上記の考察から、「ことがない」は否定の無意志自動詞表現よりも否定の語気が強く、事態の完全不生起を表すことが確認できた。また、頻度副詞を伴う場合、この違いがなくなり、いずれも否定の度合いが下がり、事態発生の可能性が低いことが示唆されるということも明らかとなった。

5．事柄の客観性

３節で述べたように、無意志自動詞表現と「ことがある」は「話者の判断による可能性」、「客観的叙述による可能性」、「事物の属性」という３段階の可能性について述べることができる。「客観的叙述による可能性」と「事物の属性」についていずれも客観的事実に基づいて述べている点においては、無意志自動詞表現と「ことがある」は相通じている。

一方、「話者の判断による可能性」の場合、判断の依拠するところの客観性においては、両者の間に差異が見られる。すなわち、「ことがある／ない」が実際に繰り返し起きている事実や客観的依拠などに基づいた話者の判断を表す傾向があるのに対して、無意志自動詞表現は事柄が生起するか否かに対する話者の確信的判断を表しているものの、客観性による制約を受けておらず、しばしば話者の主観的色彩を帯びる場合があると考えられる。

以下では、事柄の客観性における無意志自動詞表現と「ことがある／ない」の違いについて確認してみよう。まず、次の例文で両者を比較してみよう。

㉕　ドイツのプロ、ブンデスリーガで腕を磨いた卓球選手Mは中国スーパーリーグに初参戦し、浙江省チームで来月から約２カ月間プレーする。「実際に行くことで、自分に足りないものがいろいろa．分かる／b．分かることがある」と、彼は未知の世界を待ち望んだ。

（25b）における「自分に足りないものがいろいろ分かることがある」は、「未知の世界」に対する話者の判断として捉えられる。これは一見、単なる話者の主観的推測のように思われるが、これまでいろいろと経験したことの中から導き出された客観的知見である。これは「ドイツのプロ、ブンデスリーガで腕を磨いた」といった表現からも読み取れる。このような「ことがある」を用いた発言には、「実際に行くことで、自分に足りないものが分かる」事柄の発生する可能性はこれまでの経験の中にのみではなく、「浙江省チームでプレーする」という未来のことにおいても存在するという意味合いが込められていると感じ取れる。これを（25a）のように無意志自動詞表現「いろいろ分かる」に置き換えると、未発生の事柄に対する話者の確信が強まったものの、発話内容の客観的意味合いが薄くなったように感じられる。

現に存在しない、あるいは客観性が欠けた事柄について述べる場合には、両者の違いはより明確となる。そのような場合、「ことがある」よりも無意志自動詞表現が用いられやすい。このことを次の例で確認しよう。

㉖　嘘をついたら、鼻がa．伸びる／*b．伸びることがある。

童話世界を除けば、㉖においては「ことがある」が用いられにくい。その理由には、「嘘をついた」条件下で「鼻が伸びる」ことは現実世界に存在し得ない事柄であることが挙げられる。「ことがある」に対して、無意志自動詞表現が事柄の客観性にとらわれないため、(26a) は適格な文である。

しかし、次のように、㉖を否定文㉗に置き換えると、「ことがない」も用いられるようになる。

㉗　嘘をついても鼻はa. 伸びない／b. 伸びることがない。　(＝(9))

「ことがない」を用いた (27b) が適格なのは、「鼻は伸びない」ことが客観的事実だからである。一方、(26a) と (27a) がいずれも成り立つのは、無意志自動詞表現が「ことがある」とは異なり、事柄の客観性による制約を受けないからである。

以上の考察から、「話者の判断による可能性の有無」を表す場合、事柄の客観性という面に関して無意志自動詞表現と「ことがある／ない」との間に差異のあることが明らかとなった。それは、一言で言うと、無意志自動詞表現が事柄の客観性に関わらないのに対して、「ことがある／ない」は客観的事柄に関する可能性を表すということである。

「ことがある／ない」の客観性に関する本稿の主張は先行研究においても確認することができる。金子 (1980) の指摘にもあるように、「ことがある」は「くりかえしのすがた」であり、事実として存在する経験を述べる。そして、「ことがない」によって表される事柄の《不生起》については、藤森は話者の論理を越えたより客観化したものとして捉えられるとしている。

第３節～第５節を通じて考察した結果、無意志自動詞表現と「ことがある／ない」の類似点と相違点は、次のようにまとめることができる。

Ⅰ　類似点：

無意志自動詞表現と「ことがある／ない」はいずれも《事態発生の可能性》について述べることができる。その可能性には、「話者の判断による可能性」、「客観的叙述による可能性」、「事物の属性」という３つの段階がある。

Ⅱ　相違点：

１）事態の生起する可能性の度合いにおける相違

肯定文の場合、無意志自動詞表現が事態発生の可能性について100％の度合いとして述べるのに対して、「ことがある」はそれ以下の度合いを述べることもできる。頻度副詞を伴う場合、可能性の度合いが頻度副詞によって明示されることにより、両者におけるこの違いは見られなくなる。

否定文の場合、「ことがない」は無意志自動詞表現よりも事態生起に対する

否定の語気が強い。また、頻度副詞を伴う場合、両者はいずれも否定の度合いが低くなり、事態生起の可能性が低いながらもあることを表す。

２）事柄の客観性における相違

「話者の判断による可能性」について述べる場合、無意志自動詞表現が客観性による制約を受けず、話者の主観的断定を表すこともあるのに対して、「ことがある／ない」は事実や客観的依拠に基づいた話者の判断を表す。

6．語用論的用法

前述した無意志自動詞表現と「ことがある／ない」に備わった性質は語用論にも反映している。無意志自動詞表現は戒めに多用される。一方、「ことがある」は控え目な発話、注意、警告、婉曲的な助言、説得、責任逃れなどをするとき、あるいはまた科学などの論説に用いることができる。以下、このような語用論的用法を具体的に見てみよう。

無意志自動詞表現は、事態発生に対する断定を表すので、しばしば戒めに用いられる。

㉘　嘘をついたら、罰が当たる。

現実には、「嘘をついたら」という条件下で、必ずしも「罰が当たる」という事柄が成立するとは限らない。「嘘をつくこと」と「罰が当たること」との間には必然性が存在していない。それにもかかわらず、実際には、実現の可能性が極めて高いことを表す無意志自動詞表現が用いられている。このような言い切った形で、あたかも両者の間に必然性が存在しているかのように断言することにより、「嘘をついてはいけない」という意味が強められ、戒めの効果を発揮すると考えられる。こういった場合に、「ことがある」は具合が悪い。

「ことがある」は、事態の発生を断言しないという意味合いがあるので、聞き手にとって好ましくない発話において、語気を和らげ、丁寧さの効果をもたらすことができる。

㉙　今、若い方々の勝手な行動は目にあまることがございますね、私たちから見ておりましたら。公民館に来ても、乳母車を泥がついたまま平気であげる、と聞きました。公の場に。「私の車取られたら誰が弁償してくれるん」とおっしゃる。そういうことが平気で言えるお母さんがたくさん。（第７回「市長と一緒に熱々トーク」
http://www.city.tokushima.tokushima.jp/koho_kocho/gaiyo05_08.html）

㉙は若い人たちの行動に不満を示す発言である。「若い方々の勝手な行動は

目にあまることがございます」という文を取り出してみれば、「勝手な行動」が「目にあまる」、つまり、「許容範囲を超えている」という怒りが、「ことがございます」を用いることで緩和された表現になっている。実際、㉙のコンテクストにおいて、「そういうことが平気で言えるお母さんがたくさん」という表現から、「若い方々の勝手な行動」が多く見られることが分かる。ここでは、「ことがございます」を用いて、発言内容を控え目にすることによって、若い人たちや聞き手に配慮を払っていると考えられる。

ところで、「ことがある」によって表される事態は、マイナスの意味を帯びることが多い。したがって、「ことがある」はしばしば望ましくない事態が発生することへの注意や警告に用いられる。場合によっては、話者は、注意、警告することを通じて、聞き手に、ある命令、アドバイスといったメッセージを婉曲的に伝えることもある。

㉚　（ガムの注意書き）容器に衝撃を与えると中のガムが割れることがあります。

この文は明らかに注意を喚起する表現である。使用者に対して「ガムが割れる」可能性があることを伝えることにより、「容器に衝撃を与えないでください」というメッセージが託されている。次の㉛は、聞き手にアドバイスをする発話である。

㉛　ドライブにお勧めの道路ですが、金精峠を境に日光と群馬県との天候は大きく変わり、群馬県側では５月でも雪が降ることがあるのでタイヤチェーンは必携です。　（http://www.ippo.jp/blog/2006/04/post_54.html）

事柄について客観的に述べるという特徴を有する「ことがある」はまた、科学などの論説や説明書など、改まった文体が求められる場合にも多く用いられる。「ことがある」はさらに、説得や責任逃れをする発話にも適している。

次の㉜、㉝はそれぞれ科学の解説文と商品の説明文である。

㉜　カイヤドリウミグモ　節足動物の一種。幼生のときに二枚貝に寄生し、貝の体液を吸って数ミリから１センチ程度に成長。大量に寄生されると貝は衰弱し、死ぬこともある。（20080730／東京新聞／夕刊二社／12頁）

㉝　（DyDoの「やみつきになるカフェオレ」）保存状況により、ミルクの成分がリング状に浮いたり、コーヒー等の成分が浮遊・沈殿することがありますが、品質には問題ありません。

次の㉞は、「ことがある」の使用が責任逃れにつながっている例である。すなわちここでは、「ことがある」により、「保存場所」に起因するということの客観性が主張されていると同時に、話者の生産過程における責任が排除されている。

㉞　神奈川県藤沢市と横須賀市で販売されたカップめんから防虫剤成分のパラジクロロベンゼンなどが検出された問題は、どこで成分が混入したかが焦点となっている。…（中略）…保存場所によってにおいが食品に移ることがあるといい、藤沢、横須賀双方の商品の製造元親会社「日清食品ホールディングス」東京本社は「横須賀市の例は“移り香”による異臭クレームとして処理していた。…（中略）…」と説明。

（20081024／東京新聞／夕刊社会／11頁）

「ことがない」も科学などの論説や説明書など、改まった文体が求められる場合、また、説得や責任逃れなどの語用論的な効果を引き出す場合に多く用いられる。これは、「ことがない」が事柄について客観的に述べる特徴があると同時に、強い否定の語気を含んでいるからだと考えられる。

㉟　結核は結核菌に感染して起こる感染症。…（中略）…感染源は人。結核菌は、人のくしゃみやせきなどのしぶきに含まれ、それを吸い込んで感染する。人から排出された後、水分がなくなっても空中に漂うが、物から人へ感染することはない。　（20090424／東京新聞／朝刊家庭／11頁）

㊱　豚インフルエンザから変異した新型インフルエンザの感染拡大で、メキシコ産や米国産の豚肉に対する輸入禁止措置を取る国が出る中、WTOなどは三日までに「豚肉や豚肉加工品が感染源となることはない」と安全性を強調する声明を発表した。

（20090504／東京新聞／朝刊３面／３頁）

㉟は「結核」に関する科学説明文で、「ことはない」を用いて「結核」の性質について説明している。一方、㊱は「ことはない」の使用により、「豚肉や豚肉加工品が感染源になる」ことの完全不生起が強調されていると同時に、「豚肉や豚肉加工品が感染源にならない」ことの確かさも伝わっている。これは豚肉などを恐れている人々に対して、豚肉などの安全性を強調する声明として、その説得性を増す。

次の㊲は「ことがない」を用いて、責任逃れの効果を引き出している。

㊲　（「農薬餃子」について）管理する旭食品の関連会社の担当者は「こちらでは預かった商品の段ボールを出荷までに開けることはなく、異物が混入することはないと考えている」と話し……

（20080204／朝日新聞／夕刊／２社会／14頁）

上の文においては、「担当者」は「ことはない」という言葉遣いで、「保管の間に農薬が混入する」ことについての可能性を現実の取り扱い方法に鑑みて否定することにより、現実に起こったことに対する管理責任から注意をそらしているように読み取れる。

7. おわりに

本稿では、意味的観点から無意志自動詞表現と「ことがある／ない」を比較し、その類似点と相違点を明らかにしたうえで、両者の語用論的用法について考察した。その結果は次のとおりである。

①　意味的類似点：

両者はいずれも「事態発生の可能性の有無」について述べることができる。

②　意味的相違点：

両者の間には、「事態発生の可能性の度合い」と「事柄の客観性」に関して差異が認められる。

１）事態発生の可能性の度合い：

無意志自動詞表現が事態発生の可能性について100％の度合いとして述べるのに対して、「ことがある」はそれ以下の度合いを表すこともできる。一方、否定文の場合、「ことがない」は無意志自動詞表現よりも否定の語気が強く、事態発生の可能性がゼロであることを表す。

２）事柄の客観性：

無意志自動詞表現が事柄の客観性にとらわれないのに対して、「ことがある」は客観的に事柄について述べるものである。

③　語用論的用法：

無意志自動詞表現（肯定）：戒め

「ことがある」：控え目な発話、注意、警告、婉曲的な助言、科学などの論説、商品などの説明、説得、責任逃れなど

「ことがない」：科学などの論説、商品などの説明、説得、責任逃れなど

無意志自動詞表現と「ことがある」は話者の判断による可能性を表す場合に、「だろう」「かもしれない」などのモダリティ表現に通じる点があると思われる。意味･用法におけるこれらの表現の類似点･相違点を考察することを今後の課題とする。

注

１）仁田（1988：35）は無意志動詞について次のように定義している。

自己制御性とは、動きの発生・過程・達成を、動きの主体が自分の意志でもって制御できるといった性質である。自己制御性を持った動詞が意志動詞であり、自己制御性を持たない動詞がいわゆる無意志動詞である。

本稿では、この定義に従い、自己制御性を持たない自動詞を無意志自動詞であるとする。

2）本稿では便宜上、「Vる＋ことが（は、も……）ある」を「Vる＋ことがある」と、「Vる＋ことが（は）ない」を「Vる＋ことがない」と略称する。なお、「Vる＋ことがある／ない」における「こと」は実質名詞として捉えられる場合もあるが、本稿では、形式名詞として用いられる場合のみを研究対象とする。

3）仁田（1991：52－53）では擬似ムードを疑似モダリティと称している。真正モダリティとは「言表事態や発話・伝達のあり方をめぐっての発話時における話し手の心的態度の言語的表現である」。「『発話時における』『話し手の』といった要件」から外れたところを有している心的態度の表現が〈疑似モダリティ〉である。

4）寺村（1982:269）は「あるものにとって，あることが可能だというのが恒常的であれば，それは，その主体がそういう『能力をもっている』ということを表わす」と述べている。本稿の「属性」は寺村が言うこの「能力」に相当すると思われる。

参考文献

金子尚一（1980）「可能表現の形式と意味（Ⅰ）―“力の可能”と“認識の可能”について―」，『共立女子短期大学紀要（文科）』23，pp.62－76

寺村秀夫（1982）『日本語のシンタクスと意味　第Ⅰ巻』，くろしお出版

仁田義雄（1981）「可能性･蓋然性を表わす擬似ムード（文法研究の諸問題）」，『国語と国文学』58⑸，東京大学国語国文学会，至文堂，pp.88－102

――――（1991）『日本語のモダリティと人称』，ひつじ書房

姫野昌子（2003）『形式名詞がこれでわかる』吉川武時編，ひつじ書房，pp.39－45

藤森弘子（2000）「談話における『コトガアル』の意味と用法」，『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』26，東京外国語大学留学生日本語教育センター，pp.33－47

藤森弘子（2003）『形式名詞がこれでわかる』吉川武時編，ひつじ書房，pp.50

－58
呂　雷寧（2007）「可能という観点から見た日本語の無意志自動詞」,『言葉と文化』第８号，名古屋大学国際言語文化研究科日本言語文化専攻，pp.187－200

例文出典

１）新聞：朝日新聞／中日新聞／東京新聞
２）検索エンジン（検索期間：2008年４月１日～2009年８月31日）
Google（http://www.google.co.jp/）
Yahoo（http://www.yahoo.co.jp/）